

地方だより

伊勢湾台風の災害があまりにも大きかったので、政治的に急ぎ造られることになった研究部であることは皆様ご承知の通りである。設置方針と、それに要する予算はスムーズに決まってしまったが、それから先が大変であった。このあおりをくらって高層気象研究部が空中分解してしまったのである。難産のあげくに生れた未熟児が目下の台風研究部であるといえばその内容も諸兄に相像がつくであろう。台風の解析と予報研究の部門は予算の査定で切り落とされてしまい、第一年度に作られたのは、台風内の中小気象・物理気象部門（第一研究室）と



台風研究部の一部。屋上に見えるのはレーダーのアンテナ

台風災害・高潮部門（第二研究室）、それに消えさった高層気象研究部のうちから台風に関係の深いレーダー部門が第三研究室として台風研究部に入った。

気象研究所台風研究部

「安保反対」「国会解散」と叫びながら国会の周辺をデモった私達も、実際に国会が解散されてしまったために、定員法改正案の成立が年末まで延びてしまったのはすっかり困った。それでも室のメンバーがほとんどないまゝに、研究室新設の仕事とか研究計画そして研究の第一歩は着手された。

第一研究室では琉球諸島から関東までのびているレーダー網を使って、台風を警戒・追跡する技術の研究に当座の重点が置かれ、さらに台風の微細構造や台風に伴う豪雨・暴風についての研究を進めようとしている。また回転実験台を使った渦の研究や、風洞・野外における地表風の実験については、物理気象研究部にその研究を委託している。

第二研究室では台風災害の実体と本質を調べると共に、防災官が行う仕事の参考資料になるようなものも手がけておくようになろう。目下のところは災害関係資料の収集に最大の努力が払われている。また高潮関係ではその予報方式の研究ならびに数値実験を進めており、さらに適確なデーターを得るために、東京湾の第二海堡に観測施設をも置くことにして作業を進めている。

第三研究室ではレーダーとその気象への利用について従来通りの研究を進めており、今春に測雲レーダーが動きだせば、高層の構造とか降水の発達過程についての研究が非常に進むであろう。また絶海の孤島や半島の先端に設けたレーダーで観測した台風の像を、そのまゝの形で数百キロも隔れた予報中枢まで電送する技術の開発をも進めている。

台風研究部は台風の実体を掴むための努力は勿論であるが、その設置されるようになった動機からみても、防災と現業技術に密接した研究に力を注ぎたいというのが私達の願いである。

（渡辺和夫）